853
166

新撰万葉集

函號 二ノ一 七八
書名 二十一代集
冊數 五六
類 和歌

第七二號

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新拾遺和歌集巻第十七
釋教哥

ともろともに一味の衣にあらためしかひありて往生の素懐をとげ給ひし事

のきはにおくれ侍りける善慶法師

こもん

比叡山の中堂にて常坐三昧行ひ侍りける時

傳教大師

わさらけく後の仏のみまえにもえてつかへよのりの大

時物忌の釈をまて御

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

ふる世おもふけぶりの中

ひとりすむ風よりもれぬ苔の戸に

人の功徳つもりて那よ指折つつすそ

大納言三位

消えむ時の人のうらやまるなり

二事をひとりの心にそなへ侍りし十の技よく

勝うす

慈覚大師

法華経序品

ふるき人乃光よ南よ多みそやし

あたらの為日去社

湯をさんの水よりのこれる良信
隨喜功徳品何況於法會
水よりおひいでたる谷川のながれもあり
如寒衛得大
谷の水（まま）千五百番歌合
てもまま
ちさんをもちひてはかれをこのひさ
よ須彌乃至小兵眼源義
中納言為房

千載尺教
寺子内親王家中将
小野宮大臣のひ日
捧物
周防内侍

ちさんの前をしめ神よりうつりひ池の水よりにごれ
母のあよ経
前中納言定家
著賢経我心自空罪福無主
寂然法師
小野宮大臣のひ日捧物
周防内侍

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

延文二年七月雨の
降る夜詠る
入道二品親王尊誉
二品法親王尊助
高階宗成朝臣

帝室圖書之印

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

扇解脱風塗世悩熱
汝眼淨患
山乃至不入日月所照
世尊不說之汝迦葉不聞之汝阿
夢窓國師
海水不動如是諸人亦復如是
訳散骨
如来滅後
大慈悲直義
園城上人
是我等之命也
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

不倫盗戒を
心うさえおもしも山里
迎磨寺戒壇さ
戒をこれひろ時
ひのもむろ時よ
識實性の唯識
釈教の印哥
らおもひやそ
中勢の歌を
古
法中納言源全
お僧正顕遍
入のもくもり

源宰多院御製
後撰
一色一香無非中道
僧正遍昭
多香色香を聞とや
善無不二邪正一如の心と
お大僧正行尊
今ぞ知る人の心の
世間相常住のうた
有疑
素覚法師

家集百九十

[illegible]

頭しらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

般舟讃一到泣色

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山時製も不宜

[illegible]

養衣ひとへ[illegible]を着[illegible]

又神通の中よ天耳通の心を

[illegible]

旅勤と

衣裏のあるつきを給月[illegible]

釈教の今代中よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 教むけるく花のもとにて
[illegible] 宮すとて丈六の佛をたてまつりけるに
[illegible] 贈両上人
[illegible] 康資王母集
[illegible] 慈誠上人
[illegible] 禅波羅蜜
[illegible] 浅香社版改め大正
[illegible]
[illegible] 釈教哥
[illegible] 慈誠上人
[illegible]
[illegible] 心の當ぢ流通の幡よ幡付給ふ

[illegible] 心海上人
[illegible] 菩原寺を興隆して後古寺修と云事を
[illegible] 地蔵菩薩を 慶政上人
[illegible] 地蔵乃名号をとなへ為道朝臣
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

題しらず　　天台座主源源

西へ行月を心のそみてまた
行へも西の門そ有ける

月前述懐

月影程ふかき山の秋の暁
やすらはぬいさよふ月よあくるまて

後朝恋

後の涙や袖の露ならん

寄風恋

音へさそふ秋の風
吹まよふ

三五夜人々に具して月前遊宴
皇太后宮大夫俊成

寄月述懐

ゆくさ来乃ひろもと
完竟即のこと
一ひらの
心月倫の心と
為れる心乃月
芸想心論の秋見自心秋如月輪を

惟賢上人

まことにうけとりかたき心地をおもひ入てそ
お大僧正成恵
後の世のことをそ
祝僧正寛伊

たのしれよ御法のこゑとすゝめても
　おもふ儘にも植ゑ置ける
　かしこの物よつゝそしけり

はるくとおもふ流のかすかにも
　思ひ入通訳するの通

谷川のせゝらぎたにぬるゝとそもうらく
　慨法乃悲歌聲をきゝそうみ給ふ

今ふくも吹ちりぬるかぜの
　思ひ兼岡白太君

いそくもつとも
　和泉式部

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

新拾遺和歌集巻第十八

雑部上

早春霞を

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

読人しらず

紅塵の風なき春のまどろみに
仙遊の絵を心にぞ学ぶ

忠見

家
学び立て誰をたのまん春の山
風来上巳信明 後明集全同
霞こそ

こゝろ 家下同
うの出く

深草やうづらの床は秋ながら
春雪

春ごとに雪のみおほき吉野山
早春の心をよめる

民部卿為明

風ふけば峯の白雪ふもとなる
野春雪といへる

順法院御製

入道二品親王覚助

聖人はまことをみがき神明は
正直をうけ給ふ

源何秀

山けの雪ふきとく春風に
　　あらそひ消ぬうめとさくらと
　　永元百首　寄時梅
匂ふあけの窓吹つる春風に
　　中務乳母　家百首
　　奥侍従原親
くれ竹の夜ふし勝の花うたゝねの
　　顕仲
花のあるじとまつに見捨てや
　　正三位成国

これてうきはの別を恨ても
　　道助法親王家卅首
吹ぬ間のうもの春めもるかとも花の
　　顕昭
若木より濃よりうつる春の色を
　　法眼宗信
石清水幸合る月前落
　　正三位知家
積ては人跡よりつもる山ぬめの神よ松の月を
　　百首歌奉献

万三旅 長哥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今もなほ（ほ）つきせぬ名の立ちて
　　顕しうる
なく〳〵も里ある人の月夜かな
　　徽安門院一條
朝立月雨
　　前中納言定家
むかもをろの（川百首の中）
六月両のみを
　　後鳥羽院御製
山ふところもしくもしぐれもる六月雨の
　　左京大夫顕輔
（一）
もの（二）
夏の（の）月影もまちえぬ六月雨の
　　後鳥羽院御製

後
歌のこゝろを
つゞめてあらはし
よめる
夏山のこゑひこゆかぜに
　二条院讃岐
六帖
うの花のしらやのそこ
とにかくこゝろものゝ
こゝろもふかゝらて
よめる
こと花をのそみなうひ夏草を
　藤原朝定朝臣
後拾遺歌仙
佐竹侯藏
逆ちりてこゝろなをもれ夏の夜の
月をみるまてすゝしき
　常磐井入道前太政大臣

暮ふれば秋の空より降る雨の
せきもる人もつらしの水かな
　　藤司流師
心なき滝のしらいと音もなし
　　嘉久元年内裏歌合　水邊
浪くだく人やなからん夜もすがら
　　前大納言伊平
文保百首　冬中
　　法印昭慶　白石倉

なく蛙のこゑもかすかに夜もすがら
　　従二位幼家
入日さす麓の下葉そめそめて夕立過ぬる村雲の峰
　　僧正覚信
夕立のふれる跡の山の端に月の影ます秋の初風
　　源時朝
雨ふれば山下風も松なる音ぞ八
　　相模御郎従伏見殿
暁深き軒のしのぶ草
　　前京兆永好

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

秋風の夕日うれはぬくさ哉　法皇御製

秋乃風幾代命共ゆ

秋ふかきまきの戸そとの夕暮に

老の涙おとしそふかし

衰山深き頭を

七夕哀

秋ふくる窓の竹風ひとつ音の

山陰あれて世はひくらしの

なくをあん

雅房卿

雅縁師仙覚

万十

うつにうきひも

きかへしひこほ

つつまきて

ふるもこのそと

万八

ひこほしのつま

こまきて

ゆふのうらまき

きのそとも

雅房公うしく吹ぬむすひ細くやうらん

夏和百首寄草

前大納言経頼

ふかくなるらん

ふるまゝ袖のうへくらん秋風に

秋のはしめくうみ行ら

寂蓮師

露けさにおきそ添山の苔の下

訪しらす

小倉の風のやとれ葉の

左近大将師良

光明峯寺入道前摂政家百首　夕萩　文永

建保三年内大臣家百首　夕萩

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

定家
[illegible]

夫木 土秋夕萩

[illegible]

百首哥奉[illegible]時

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

仲秋夜参議雅綱朝臣の
堂の前の月見むとてまかりて

家集
ひさかたの雲のうへまでてる月を
あかしとやいはむ
伊勢大輔

安倍宗時朝臣
澄みまさる秋の風さへ
添ふる夜は
参議雅綱

後古拾遺 建永の比
大神宮より参りて侍りし
三十首の歌中に
後鳥羽院御歌

おきもせず
秋の夕をや
と独のみ

百十他方
如是我聞
一時佛在
舎衛國祇樹給孤獨園
與大比丘衆千二百五十人俱
爾時世尊食時著衣持鉢
入舎衛大城乞食於其城中
次第乞已還至本處飯食訖
收衣鉢洗足已敷座而坐
時諸比丘來詣佛所頭面禮足
退坐一面
爾時尊者阿難在大衆中
而白佛言
世尊甚奇甚特
如來威德具足成就
所以者何
我於今日清旦著衣持鉢
入舎衛大城乞食
時城門外有婆羅門
見我相已而作是言
瞿曇汝相甚惡
汝相甚惡
我即答言
婆羅門
我相不惡
婆羅門言
瞿曇

秋哥中に　源氏経朝臣

[illegible]ともやまの雪のあけぼのみ[illegible]

[illegible]

[illegible]

石清水社会

社風の吹そめしより秋の月
影をさやけく照そへてけり

前大納言経頼

秋ふかき夜半の月乃澄のぼる
松の梢ぞ

左兵衛督基氏

嬉ふらけきふれ初の秋乃空にうつろふ
月影

権中納言公豊

更ゆけば空もしづかに秋の月
影のみ澄て物ぞさびしき

前大納言経頼

夜ふけて秋の月影澄ぬれば
松の梢も風ぞ吹ける

源高嗣

みよしのゝ山の端乃ほのぐらく
月影さむし秋の夜半

お大納言為世

こぬ人を心つくしのあきをせよ
月をながめよ

前大納言経頼

月影乃そらにのこれる

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

月のうつろふを
秋とをきてそ涙の
しぐれつるかな

月のうつろふをみて

七條右

しけるに

高階重successful

久かたの月のうつろふみるからに
たのまれぬ秋の夜半かな

大江維順

秋の夜もふけてうつろふ月をみて
面そこの夜一時月

等招提僧正

春たつのみるとそなく月影の
たのまれぬかな

源宗氏

秋ふかくおくの山田もそ時雨ける
月をそ

月前遠情

小侍従

月前遠情といへる事を

いつとなくあらし秋の
月をのみ

前中納言定資

春日野をうつろふ月の影よりも
雲井にそてる秋の夜の月

讀人不知

夏の夜のひとよをみつる也のみそ
月を

雅成親王

文治御時のあはせの歌や
侍りけん

前大納言教経卿

月のうつろふ秋の夜半

湖月をよめる　　大納言師

湖水こほりて月やどりけるを

ながめつゝ

数々の舟乃うち記れ浜の海士と

見うしなひてのち

岡白おた倉家と銘して舟よこ行る

月海邊月

秋風乃吹ぬる夜乃

和乃原月さえそひ汀乃うへもあらん秋乃

浜二源院師教

湖月の心を

志賀乃浦やうらくく杜風の吹ころ浪よりて月乃

さえ渡るうへの秋とも見えぬ

元仁三年八月十五夜歌合

月乃あるをみ物乃うら小月の夢

藤原為教卿

古

貞和百首歌よみてさしつかはしける時

等持院贈左大臣

旁そこ数ひろの山風ふきはらひて物乃月乃

秋しらす

前参議信為卿

物おもふ袖もふかぬ夜乃海ん月ふさねと

平高宗

更ぬ乃ふ浦ゝ乃江乃浦波うちもとめて月乃

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

永福門院

永福門院御集

文保三年百首

中納言為兼

仏眼院御製

待賢門朝

お大納言為定

北京仲敦

詞花雑上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たのしみ

禅信法師

山色青青好雲松檜老

苔深水遠時

落葉

梵家後院新

前大納言純房

雨夜聞時

殿高門院御

前内侍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いせ物や浦風うらく涙萩の
　冬乃谷村中よ　聖高法親王
卵酒温石あるかなきかの
　冬籠の内　大江忠房
冬枯のけしき蓮糸なり
　百首哥たより時雨寒草
風さむみ君の衣も乾蔵
　入道二品親王尊誉
　冬月の哥とそなめる
　等持院贈左大臣

冬月　叶氷員未寒谷

寒むき夜ふけのをさうらひ風も月もさし通うつ
　冬至とふことを
　院御製
冬ふかみさびしき色に松そひぬ山の向ふ雲乃はる
　亀山殿御哥　第大納言経継
冬乃歌月かむさ谷のアよ水をてくふ物うの
　二条関親王家五十首哥よ冬時月
　中納言為茂
ふる雪の跡見え渡りやうて初ふるを月の雨
　たいうら風
　宗久法師
今朝ふれ行のみひと的水のおもてうらうら

百そ分をもゝろよ

同六百

ゆしまさの山風さむみ衣かたしきひとりかもねん

澁水を

右京門たきつおとのれもるやまの

有原長秀

白川の関

家功法師

冬の秋乃むけき月よ敷みそ俤んの涙よやさる水

百そ分のたくさつわし時水鳥

むさくろ川鴨のうきねの波乃枕

挽家後実継

お大納言公藤

河のさにむもつおれあくるそ川のしらくさつゝ波

檀中納言公雄

河よ鳥

山ふの春乃河のさ秋をまつるまてもるよりおもひ秋よ秋とのうくる

百首分なもし時千鳥

二条法親王覚乱

人なみよ名をやうるとつの浦よ波江もふ友なみる冬

信枝法師

おもてをも

人もれぬ秋とのこる紅葉濱そてうつりて波

正三位通茂女

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

和泉の浦よりとめて漕ぎ渡る舟人一つ

羽根を月のみ出ぬ乃浦なれや

うらめしの松風や、おきつ波

延文二年

百首歌たてまつりし時

島

うけて猶ふる涙の雲もなし

春は流れの氷とぞ見る

摂政太政大臣

春は流れの氷とぞ見る

春より流れ合ふ谷川

水嶺の雪もとけぬと聞くからに

印本新撰和歌集

ゆき分け

春は流れの氷とぞ見る

延政門院新大納言

浦つ風花の白浪よりかけて

網代ぞ氷魚のよる初めける

従二位家隆

道因法師

あらそひし人のかずにもあらぬ身は

鷹狩をのみ思ひ立ちけん

源氏頼

なき名ぞと人に語るもくちをしや

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

ありはてぬ
心のそこのうたかたも久
しくとゞまるためしなれば

源氏

なきあとをねてその山ぢの
露しげみ

源頼清

ふりすてしよもぎのもとの
秋風に

前宮の勾萱持源
乃時換

夢窓国師

四人のきけるまゝ

源氏

冬哥中に

なき宮乃ねをなきてとゞめ
ける

源宗氏

源氏
なきあとをねてその山ぢの
露しげみ

夫木卅三
玄夫修正源忠
泉源山寺田楼
矢を後ねおて
しらるゝあらけ
の神も御ゆるし
ありけり

あまのかるもに思ひたちて
ぬれ衣ほすてふ
名をのこしけん

藤原盛徳

ひてるやうちそゝれ白妙の
ゆきとけやらぬ
雄琴の浦

雄琴乃浦さこちをくり
百そ今年時雨
お関白左大臣家

[illegible]
[illegible]
[illegible]

雑哥中

百首哥めされ侍りしに暁鶏

御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

嘉元百首 冬

大井川もみぢの比

大井川もみぢの比
こころそらなるふる雨
やあるらむもとと

みよしのの山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり

名所百首 寄衣

初冬

初冬

家

うきの浦入海

うきの浦入海
けふくみてうき世も牡蠣の
浪之信明朝臣

海眺望

海眺望
百そ度のめぐりの時
雨雲のなごりも波の
秋風

旅泊

旅泊
松浦舟
うきねするさよの
ふけゆく
あまのとまや
かたこと

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

保延元年内裏合
探察使公通
平泰時朝臣
法皇御製
吉
赤
元百首
亀山院御製
前大僧正道昭
大伴宿禰家持
大伴宿禰像見

なかねども

日くらしく侘のたくなりゆきをおもふ露ばかりの秋風

前大納言為家

ゆく秋山まくさのけふ尽てまたあすの夕をいそぐ旅人

従四位下行左近衛権少将藤原朝臣為相

武蔵野のうらぶれ衣ほしわびぬ古郷人のかりそめの袖

前大納言為家

かりそめの袖とて後の衣更人よりありわびて

ふるさと

ふるさとのあけの衣乃更衣ころもかへうきねぐらなれども

前関白左大臣

百首歌奉りし時

月前旅

ふくかぜもあくるをいそぐ雲井よりうつるかりの一声

名所百首歌めしし時

順徳院御製

ゆふ風ぬ(ひ)の浦(清正)よりこえくるかりの一声

忠見清の(ひ)のうらよりこえくるかりの一声

やけきこゑいまやみちのくあまの原ふりさけみれば

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

忠見集

みつもれるもの那波のうら

河邊

信吉のまれとかうるうらみつも

村上 応和二

應和二年一宮哥合よ

忠見

みん人しらん

古 七 万代十一 三

四方の浦の浪のとけ秋神なたそんうこのうえ

文保三年百首哥奉

為大納言為

万代十一 三

村重集冬

左近大将公長

時昌所 筑紫にて

おもひのほかにくだりて侍りけるに

立ちわかれいなばの山の峯におふる

頭しらす

善源法師

奥深き色をも知らで染めてける

奥知らぬ

古 時

奥和百首哥 中宮亮家公家毎

かくしつつ思ふ人のみ世の川さのみやまひて神わたる

頭しらす

後嵯峨院御製

亀山のこれをたてみる世ハきよ瀬川とおもふ我身

奥和百首哥 中園入道太政大臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

里の名を我为山水乃うらやまし
世とともに世ふりて
ほくとうさせむとよの行のつまれさえ久に
百首歌たてまつり時
竹

三条院御製

三品式部

従二位家成

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

百十七

後醍醐院御宇

弘長元年百首歌奉

六条内大臣

春日

春霞のみちたえはてぬ

康安二年三月古今集の家の仮名序

事をつゝしみて按察使実継その儘を尋

ぬる

民部卿為明

春霞たなびく山のさくら花

うつろふ方にかをぞとゞむる

遅日

按察使実継

卯月の頃よりつゝしみて幷ほとゝぎす

続古今竟宴の

玉葉集文永三年三月御製

春酒のあたりひらくるうぐひすの

古

弘安元年百首歌奉

前大納言為氏

いけ二の巻てよう〳〵次つぐ今もあつむるやもことの
貞和百首寄夢述懐
等持院贈左大臣
いにしへの乃可ことゝもおもひいてゝ夢にもみえぬ人ぞこひしき
月の前にてよめる 中納言為重
みるさ山それの名残をけふもみて秋もとまらぬ夢の月かな
小夜百首寄月述懐
前大納言為氏
めくりあふ幾世の月のくもりなくひかりそへつゝ秋をみるらん
従三位花子八月十五夜和歌を伝記をうけ給りて詠

讀侍る
こよひもしひかりそへつゝ秋をみるらん
前大納言為氏
めくりあふ幾世の月のくもりなくひかりそへつゝ秋をみるらん
前関白左大臣
ふく風のおとさへ秋の色ぞこもれる
月すみのぼる峯の松原
権大納言為世
ふく風のおとさへ秋の色ぞこもれる
月すみのぼる峯の松原
按察高範
貞和百首寄夢述懐
お中納言雅孝
よそにのみ見てこの位山をこえ行夢のさめぬる
八條入道内大臣
たのしらす二代までうけて君とまた君とあふくやそちよもかはらん

拾遺

七十の祝の時よめる

後中院前太政大臣

幸ありとおもふ今日の月をだに
あまよ五十首のうちの秋月

清原長輔

ふるさとのあくるもしらぬ月ごろも
月や中よ
をのつから袂もよよになくさめと

お大納言為氏

人のあまよ五十首の月見もりて

家

秋宿の初恋といへる心を

従二位藤原為家

恵慶法師

古

和泉浦よりとてつかはしける

曽禰好忠

源成賢朝臣

竹林院入道左大臣家にて初冬時雨

伏見院御製

後二条院御製

みよの春ちよのためしもかねてより
　　君にぞいはふ
　　陽明門院

とき世ぞとおもふこころをしるらめや
　　さかゆくみちもかぎりなければ

我身世にふるながめせしまに

文和三年十一月大嘗会悠紀方の額書を
仰のたまはせて侍二位幼忠
ろくにはべりて書給ふ

人のよをいのるこころもしるらめや
　　さかゆくみちもかぎりなければ

大納言経信

ふるさとの宿のさくらもちりはてぬ
　　屏風の絵よ花のまれなる家よ人まれなるを

よみ人しらず

心ひくかたよりてあつさのころ
　　右近大将道綱家よりかへりまゐりけるに

通命法師

おもひやれ君まつ里のさくらゆゑ
　　ちりはてぬらんかへるさの空

贈左京大夫慈鎮　自筆

あかさりしそのひのこころ忘れねば
　　いまもかへりてゆくここちする

返し

おもひやる君がこころのかへるさに
　　ちりはてぬらんさくらゆゑとは

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

貞和二年百首歌奉りし時

中園入道前太政大臣

山家にてよめる

前大僧正實伊

卒爾

中園入道前太政大臣

前律師永朝

雑家

お僧正慈妙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

万九

好忠法師

うきふしを数へつくせと人まつに
いふせんうしとこの一世乃中
ふまそと世をうき神なけて
たのもるそ浪なりける

前宮上人

ひとりぬる秋のねさめのこの夕
なにはの里の芦のまろや

法印経源

夢とのみ思ひなしつつ
いふせんうしとこの一世乃中
ふまそと世をうき神なけて
たのもるそ浪なりける

前宮上人

ひとりぬる秋のねさめのこの夕
なにはの里の芦のまろや

法印経源

後の世乃やみをはらせよあつまり
つとめ給へるそもあはれなる

業平

遍照寺

法印宗祐

源光正

若狭成藤

續拾遺雑中
今上二品親王
もろかもうきをうき世ろうきをうき世ろうきをうき世ろ

ありつつも世をいとふまでなるものは
猶古今雑下　権中納言敦忠

世をいとふ人もまたるるものなれや
またありぬべしとおもへば

源直氏

述懐百首歌の中に

前参議雅朝卿

うむる道なき物思の我のみなれや
いきて世を経るかひもなき

真後法師

世中のうきをもしると知る人ぞ
なほ下家尋

惟家忠景

頭しらぬ

我ならのあその園世とともに
老ぬる身こそ物うかりけれ

三条直信

かくてのみうき世にふるもひとえかは
夏秋百首の中に

入道二品親王守

雲隠述懐を

前参議雅朝卿

永福門院内侍

たいらす

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

浮世といふもおろかなり　清原通定

述懐の歌よみ侍りける　平政村朝臣

とかくいふきもつきもなき身ひとつ

うき世をもいとふそでなき

世捨てし後ぞのちの心なれ　信生法師

そふかのいふもなき世かな　公寛法師

述懐の歌よみ侍りける　源和義朝臣

むくむのからの笹をよめる　源義高朝臣

浮世とてそもそも月日のつもるをも

客の首述懐と

ふいつておもふねうき世かな　権少僧都行顕

浮世とも思ひ捨てもなほ残り

二条院親重卿家百首の述懐

三とせ経て浮き世の中ぞうらめしき　法二位経平

後拾　大神

たいらす

阿のおもよ阿のくにえや

涅槃経菩薩品曰是諸衆生
乃至夢中夢見是経皆敬供
養

うきも養うもみも阿

養乃至一日日のめをうつ

養なるかさ現もみへさをうつおく式養れさる

表打消そねもうさ

山田法師

後拾　大神

うきを阿よ阿のくにえや

養なるかさ現もみへさをうつおく式養れさる

表打消そねもうさ

山田法師

千載雑　慈圓

旅の世のまたねくくたひ
ねくくそ経る秋のくらもなれて

世の中をうき物思ふ
のとの上の雪

千載旅　慈圓

旅の世のまたねくくたひ
ねくくそ経る秋のくらもなれて

世の中をうき物思ふ
のとの上の雪

哭後慕父

大江為房

哭後慕父

大江為房

哭後初逢雑上
覚性法親王

よの中をうくもつらきまこ
ろをも猶いとはぬかな

哭後初逢雑上
覚性法親王

よの中をうくもつらきまこ
ろをも猶いとはぬかな

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国宣上人

[illegible]

源義春

通昌法師

平守時妻女

[illegible]

貞和百首奉[illegible]

入道二品親王

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

雑哥下

短哥

富士乃山をのぞくとてよめる

赤人

おほつかもなくかすみこめて
もろこしの
みねのそらなる
ふじのねと
てる月乃
ひかりもまがふ
しらゆきそ
いやつぎつぎに
ふりつゝきつゝ
みねのそらなる

春奥山とてよめる

讀人不知

おほふねの
ゆきかよふ
海ならなくに
しきなみの
よるべのみえず
こぎいでにけり

池水のこゝろを

この世にし
あらしさわがば
あらしなく
なみもたてらで
すめる池水

初冬述懐といふことをよめる

大納言經信

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

題しらず　花山院御製

みるやもの　秋の代ごとの
ゆふぐれは　あやしかりける
しるしかな
いふことの　あまりにたえて
ものもなく
ただ物思ふや
なくさめん　これをなぐさと
別れなば
のこりとどまる
なごりにも　人をやるさん
ものおもふ
ものおもふそら
なきものと　ただ物のごと

年ごろ乃世よ　なごんめんとは
いふ小法
ひとつもの事
うき海のそこ　むすぶ水の
かわうそ
ねぐらさだめつ　ねぐらさだめつ
あわれ
後の世までも
なりわざを
ありわびぬれば　人乃ちぎりも
ふかき世哉
谷ぜみなれば
鳥のあとも
なくやあらん
久安百首奉献
左京大夫顕輔
ものおもふ
ものおもふ

題しらず　源有長朝臣

さゝわけて人の世よりも流れ出でぬやまぢの滝のうへの雪

初句哥

萩原仲実朝臣

もゝ千世萩のえだごとにつけて

後頼朝卿

うつむきていはでやみぬる萩のうへの露をもこぼす秋の風かな

萩原仲実朝臣

うつゝとも夢ともわかぬ萩のうへの露をもこぼす秋の風かな

[illegible]

いえのうを

前大僧正慈鎮

人とはゞ奥そこもなきいはの苔みよ千歳の松の下水

春の夢のようなる心地をよめる

とまりをば誰かしめしてあだし世の夢路にまよふ人のこゝろを

初句哥

千々百番の会を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

物名

仮名序

伊勢の海の

伊勢の海の

伊勢の海の

とゝめて河よりせさうし作あり
まいらうのあをうへくみ作り
　　後三位朱政
水ひたり酒きのちくあり
西法百首哥そ
　　皇太后宮大夫俊成
よもやき
松の秋なのこゝにはむしも
ものねのそう
山ふかみまつせとらぬ
なこりかけを
入乃二ホ釈里社明

次の酒あてを酒やのあるじ
　　誰諸
山寓を
ひらくて人くるも見山里
　　中務宮家る釈空
　　大江千里
　　後恵法師
　　東天
むすらす
　　来絵條弱不珍寓
むすめらの枝乃ふけ
　　二作ヲ来
うさゝ山なをへまもせんな
　　愚見

[illegible]

家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御法風とのみ事と
　　西行法師

みよ吉野の山のあらし
寒からん小野の柴ふね
　　前大納言為家

降つもる外山の松もうもれなん
又保元年百首奉りし時
　　権中納言公雄

大井河のうへなれ水のうひ氷

853
166

3239

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用